

在宅看護と家族に関する文献検討

奥野久美子 杉原トヨ子

大阪青山大学健康科学部看護学科

Literature Review of home-nursing and family

Kumiko Okuno Toyoko Sugihara

School of Nursing, Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University

Abstract

This study was “home nursing” and “family” sample word in database CINII of the National Institute of Informatics for 26 years from 1990 to 2016, and it was conducted based on research, survey, documentation, and original work. In order to clarify the direction of future nursing care and family support about the obtained findings, literature review was carried out. From the literature obtained, we analyzed trends in home nursing research by classifying the transition of the literature before and after the long-term care insurance system. As a result, with regard to home nursing care activities and family support, (1) improvement of nursing education for securing visiting nursing professionals with nursing practical abilities, (2) necessity of terminal nursing professionals in the times when many people die, (3) improvement of the quality of life with the home care person, (4) improvement of support for nursing care family, (5) strengthening collaboration of home care family, and so on.

Key words : home care nursing, family, visiting nursing, cooperation

キーワード : 在宅看護、家族、訪問看護、連携

I. はじめに

わが国の高齢社会の現状は在宅看護の対象者の増加を意味する。厚生労働省発表2015年10月1日現在の総人口は1億2,711人で、65歳以上の人口は3,392万人となり、総人口に占める割合(高齢化率)は26.7%となった¹⁾。また将来推計人口は2012年1月に国立社会保障、人口問題研究所が発表した「日本の将来推計」によると、2040年で38.8%と予想されている。

1970年頃より、保健婦の寝たきり老人への家庭訪問が始まり、ほぼ同時期に病院診療所の看護師による訪問看護が実施されるようになった²⁾。訪問看護ステーションは1993年の全国277ヶ所から1998年では2700ヶ所、2013年では7500ヶ所に増加した。その間に、高齢者の医療費増大、核家族化の進行と独居高齢者の

増加などを背景とし、介護を社会全体で支える仕組みを構築することを目的として、1997年12月に介護保険法が成立、2000年4月に施行された。

65歳以上の高齢者の健康状態を2013年の疾病等のデータ(死因順位)から見ると、死因の第1位は悪性新生物で人口10万対947、第2位は心疾患で人口10万対561.0、第3位は肺炎で人口10万対375.0、第4位は脳血管障害となっている³⁾。

高齢者の要介護者数は、急速に増加しており、特に75歳以上で割合が高くなっている。表1のとおり、65歳～74歳の要支援認定者は65歳以上人口の1.4%、要介護認定者3.0%、75歳以上では要支援認定者が65歳以上の総人口の8.4%、要介護認定は23.0%となっている。

一方、在宅要支援・要介護者を介護する家族の状況

は平成25年度国民生活基礎調査の結果として以下のように報告されている⁴⁾。

要支援者・要介護者等のいる世帯構成としては、核家族世帯が35.4%、単独世帯が27.4%、三世帯世帯が18.4%¹⁾である。

主な介護者は「同居」家族が61.6%で、次いで「事業者」が多い。核家族、高齢者世帯、独居世帯が増加する中で、在宅看護と介護者(家族・事業者)はどのような課題を持っているのかを考察する。

II. 研究目的

本研究は、在宅看護と家族について学識者、現場の訪問看護師、行政の保健師などによる文献の考察とCINIIの検索により入手できた1990年～2016年の26年間の原著、研究論文、資料の内在宅看護実習関連、在宅看護授業関連の文献を除いた80編の知見について、在宅看護活動と家族支援に資すると考えられるので報告する。

III. 研究方法

本研究では、CINII ARTICLES WEB版を資料とした。「在宅看護」「家族」の2種の標本単語を同時に含む文献を対象とした。これら単語の出現頻度、筆頭筆者の所属、収載された雑誌、論文の種類等を集計、分析した。取り上げた文献年次は1990年から2016年の

26年間であった。

IV. 結果

1. 文献数の年次推移(表2)

標本単語を含む文献は1990年頃からみられるようになった。総数は143編であったが、今回その中から在宅看護実習に関するもの、在宅看護の授業に関する文献を取り除き80編^{5)~84)}を分析対象とした。

文献の種類を年次推移でみると、原著は2000年前後と2012年以降に多く書かれている。

報告書は2002年と2005年、2008年が5編以上見られ、調査や実践報告が多かった。資料は2000年に1点、2014～2016年は年に1編ずつ掲載された。

2. 筆頭著者別職種・所属機関別文献数(表3)

筆頭著者別職種および所属機関は、表3のとおり、半数以上の55点は看護系大学の教員が筆頭著者であった。病院看護師が15編(18.8%)、訪問看護師が筆頭著者のものは8編(10%)であった。行政保健師は5編、大学医師は4編であった。養護教員が筆頭著者の研究報告が1編あるが、所属機関は特別支援学校であった。

3. 収載誌の分類(表4)

表4に見られるように収載誌で最も多いのは、大学

表1 第1被保険者(65歳以上の高齢者の要介護度率)

単位：千人()内は%			
65～74歳		75歳以上	
要支援	要介護	要支援	要介護
213 (1.4)	473 (3.0)	1,282 (8.4)	3,489 (23.0)
資料：厚生労働省「介護保険事業状況報告(年報)」(平成24年度)より算出			
(注1) 経過的要介護の者を除く。			
(注2) ()内は、65～74歳、75歳以上それぞれの被保険者に占める割合			

内閣府：平成27年度版高齢社会白書

表2 文献の種類別の年次推移

	1990	1993	1995	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
原著	1	1	1		2	1	1	1	2			1
報告		1		2		3	2	3	7	2	3	5
資料							1					
会議録												
計	1	2	1	2	2	4	4	4	9	2	3	6
	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	合計
原著		1					1	2	2	1	1	19
報告	3	3	6	2	3	1	3	3	2		1	55
資料									1	1	1	5
会議録							1					1
	3	4	6	2	3	1	5	5	4	2	3	80

の看護学部・看護学科紀要であり20編、次いで多いのが大学紀要20編、同じく20編は日本看護学会論文集に掲載されているものであった。その次は看護教育学研究が9編、看護系学術誌も9編見られた。医学系学術誌に掲載されている研究が7編、小児看護では小児難病の在宅支援に関する報告が4編掲載されている。その他、地域看護、公衆衛生系専門誌、社会学系専門誌への掲載が見られた。

4. タイトルに使われている単語(表5)

タイトルに使われている単語としては、「家族」が29件と最も多く、ついで「在宅看護」18件であった。その他、「在宅ターミナルケア」、「訪問看護」、「終末期」、「研究(成果)」、「看護実践」、「痛(末期がん)」、「看護」、「ALS」、「事例」、「プロセス」、「在宅介護」、「高齢者」、「生活の場」、「痴呆」、「看取り」、「意思決定」、「介護力」、「対人認知」、「在宅療養継続」、「スピリチュアケア」、「看護職」、「脳血管障害」、「医療的ケア」、「ライフヒストリー」等在宅ケア、在宅看護現場と関連する単語があった。

5. シソーラスの分類(表6)

文献に付記されているキーワードとシソーラスでは、「在宅看護」が11件と最も多く、ついで「終末期患者」、「在宅療養」が9件であった。次いで研究方法の「半構造化面接」が6件、「訪問看護」、「カテゴリー」、

表4 掲載誌別研究(論文)数

大学看護系学部(看護学科)紀要	20
大学紀要	10
日本看護学会論文集	10
小児看護	4
日本看護研究学会雑誌	1
看護教育学研究	9
日本地域看護学会誌	3
日本公衆衛生雑誌	2
医学系学術誌	7
看護系学術誌	9
社会学系学術誌	5
掲載誌合計	80

「終末期」が5件、「在宅ターミナルケア」、「社会資源」、「死の不安」、「在宅死」、「高齢者」、「連携」、「阻害」、「高齢者家族」、「満足感」、「看護診断」が3件、その他には「促進」、「介護」、「自立」、「経管栄養」、「看る」、「医療的ケア」など在宅療養の質、在宅医療、在宅看護の内容に関わる単語があった。

V. 考察

表3: 筆頭著者職種・所属機関別文献数

	1990	1993	1995	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
大学教員(看護学)	1	1	1	2	2	1	2	2	2	2	3	4
病院看護師						1	2	1	2			1
研究職						1						
行政保健師								1	2			1
訪問看護師									1			
大学医師		1				1			2			
計	1	1	1	2	2	4	4	4	9	2	3	6
	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	合計
大学教員(看護学)		4	4			1	2		5	2	3	44
病院看護師	1	1	1	1	3		1					15
研究職	1						1					3
行政保健師	1											5
訪問看護師			1	1			1	4				8
大学医師												4
養護教員								1				1
計	3	5	6	1	3	1	5	5	5	2	3	80

1. 文献の推移

文献数で見ると、多様な在宅療養者に対する事例や支援方法についての研究報告が見られる。2009年の9件を除くと1990年～1998年は1～21編と少ないが、介護保険法が1997年12月に成立、2000年4月に施行されたことで在宅療養を支える基盤が確立されたことを受け、1999年から多様な在宅看護支援、家族支援の研究報告が多く見られるようになったと考えられる。

文献の種類では、1990年～2000年の10年間で8編、2001～2010年で5編に比べ、2011年～2016年の6年間で8編と研究・報告が多く著されている。在宅看護という世帯を単位とした対象では、個々の事例により在宅看護方法も用いる援助技術も異なるため、事例、研究報告も多く1～7編/年を推移している。それに比較すると会議録は少ない。

2. 筆頭著者の職種や所属機関の傾向

筆頭著者の職種や所属機関では、1990年から1998年は、看護系大学教員が7編、大学医師が1編であった。在宅看護と家族を対象とした研究は病院や施設の看護とは隔たりがあったことも考えられる。1999年～2010年では看護系大学教員24編に比し、病院看護師14編、研究職2編、行政保健師5編、訪問看護師3編となっている。病院看護師の研究・報告が多くなっていることは、1999年から病院看護師が要介護療養者の退院後の地域での生活を見通した退院支援や病院

の訪問看護事業に力量を向けるようになったと考えられる。2010年から2016年の6年間では看護系大学教員13編、病院看護師1編、研究職1編、行政保健師なし、訪問看護師5編、養護教員1編となっている。行政保健師は縦割り、分散配置が進み、高齢者相談や家族支援は地域包括支援センターの業務となり、保健所保健師は難病や小児難病の療養支援を行い、母子保健の領域での障害児支援は市町村の保健センターで行うこととなり、在宅看護の連携の課題が多くなっていることが壁となり研究や調査が進まないのではないかと考える。在宅看護活動と家族支援についての研究を進めているのが、看護系大学教員と訪問看護師であると考えられる。

3. 標本単語の分析

1) タイトルに使われている標本単語について(表5)

タイトルに使われている標本単語を「家族」と「在宅看護」と規定した文献であるため、標本単語をそれぞれ29件、18件と多い。それ以外に幅広く多くの単語がタイトルに用いられている。その中で、複数見られるのは、在宅ターミナルケアが9件、訪問看護、終末期が6件、研究5件、癌、看護、ALS、事例、プロセス、在宅介護が各4件、病院訪問看護、人工呼吸器、在宅療養者、高齢者、生活の場、痴呆、看取り、意思決定、介護力が各3件、対人認知、要介護高齢者、在宅療養継続、スピリチュアケア、看護職、脳血管障害、医療的ケア、ライフヒストリーが各2件あり、1単語

表5 タイトルに使われている単語

家族	29	高齢者	3
在宅看護	18	生活の場所	3
在宅ターミナルケア	9	痴呆	3
訪問看護	6	看取り	3
終末期	6	意思決定	3
研究(成果)	5	介護力	3
看護実践	4	対人認知	2
癌(末期がん)	4	要介護高齢者	2
看護	4	在宅療養継続	2
ALS	4	スピリチュアケア	2
事例	4	看護職	2
プロセス	4	脳血管障害	2
在宅介護	4	医療的ケア	2
病院訪問看護	3	ライフヒストリー	2
人工呼吸器	3	単語数1	77
在宅療養者	3	単語数合計	107

表6 シソーラスに使われている単語

在宅看護	11	阻害	4
終末期患者	9	高齢者家族	4
在宅療養	9	満足感	4
半構造化面接法	6	看護診断	4
訪問看護	5	促進	3
カテゴリー	5	介護	3
終末期	5	自立	3
在宅ターミナルケア	4	経管栄養	3
社会資源	4	看る	3
死の不安	4	医療的ケア	3
在宅死	4	単語数2	21
高齢者	4	単語数1	102
連携	4	単語数合計	228

が75件あった。

今日の在宅ケアの課題としては、大きく認知症高齢者の増大という背景がある⁸⁵⁾ので、「痴呆」、「知人認知」などが在宅看護の研究、報告に取り上げられることは考えられる。また65歳以上の高齢者の死因の第一位は悪性腫瘍(癌)であることから、在宅の看取り、ターミナルケア終末期、癌、スピリチュアケアなどの単語が訪問看護の課題として考えられる。さらに訪問看護の対象としての難病患者(ALS)、脳血管障害、医療的ケア、人工呼吸器、など訪問看護内容と介護家族の「介護力」の単語が使用されている。

2) キーワード・シソーラスに使われている単語

シソーラスに使用されている標本単語(表6)としては、「在宅看護」11件があり、終末期患者、在宅療養が9件、半構造化面接6件、訪問看護、カテゴリー、終末期が各5件、在宅ターミナルケア、社会資源、死の不安、在宅死、高齢者、連携、阻害、高齢者家族、満足感、看護診断が各4件、促進、介護、自立、経管栄養、看護、医療的ケアは各3件あり、2単語が21件、単語数1が102件あった。

単語として、在宅看護は標本単語として規定しているのが11件あったが、在宅看護の対象として終末期患者、在宅療養が9件、研究方法として半構造化面接法が単語として6件抽出された。在宅で「終末期」を迎える訪問看護の役割として「在宅死」や「死の不安」、「在宅ターミナルケア」を構成する地域包括ケアシステムの要素として看護診断、社会資源、連携、自立が抽出された。家族支援についての単語として介護、高齢者家族が抽出された。

鈴木(2014)は、家族看護について「高齢社会の1つの大きな契機となって高まった社会的要請が、看護学全体の中の特に家族看護学の確立を促し、学問として見直していく気運をつくっていくということが、日本における家族看護学の発展の特徴であると言える」と述べている⁸⁶⁾。認知症高齢者の増大という背景がある中で、家族支援は緊急な課題である。

4. 掲載誌の考察

1) 掲載誌の種類

掲載誌では、全期間で看護系大学の紀要が20編、大学の紀要が10編あり、看護学会論文集10編、看護系学術誌9編、看護研究学会誌9編である。医学系学術誌が7編、その他小児看護、地域看護、公衆衛生学雑誌、社会学系学術誌等に収載されている。小児看護には4編収載されているが、小児在宅看護の担い手で

ある訪問看護師の家族への関わり、特に母親の観察力を高める関わりを具体的な場面について記述していることが特徴的である。社会学系学術誌への収載文献も5編あるが、終末期がん患者の死に場所に関する要因、在宅難病患者(ALS)の人工呼吸器装着時のコミュニケーション・ツールの開発に関する文献、ターミナルケアに関する文献、家庭の概念に関する文献、家族介護者の介護ストレスと高齢者虐待(ネグレクトを含む)との関連に関するものがあり、その防止としての介護サービスの導入が効果的⁸⁷⁾ということも明らかになっているので、今後さらに心理社会的アプローチは必要であると考えられる。

2) 掲載誌の内容

(1) 原著の流れから見えること

2002年から2015年の標本単語「在宅看護」と「家族」でCINIIで検索した原著論文10編から在宅看護と家族支援の研究の流れを見ると、2002年の4編は、在宅看護場面における看護職の行動の研究、認知症高齢者に対する家族介護者の半ライフヒストリー的分析の研究、在宅ターミナルケアに関する研究、家族男性介護者の対象認知の特徴に関する研究であり、研究方法としては事例の分析、参加者観察、ライフヒストリー研究から始まった。10編中3件は看護診断や在宅看護過程、在宅看護計画立案に関する研究で、対象のアセスメント法や看護診断のモデルの開発の研究である。その他、在宅における自己評価尺度の開発も訪問看護内容の改善を目的にしたものである。

ターミナル(終末期)看護に関わるもの2編は、緩和ケアや医療—看護—介護チームケアの提起を含む内容のものである。家族介護者支援に関するもの3編は、認知症の家族介護者、小児難病の家族介護者支援、男性介護者支援の内容であった。他、訪問看護師の看護場面での行動に関する研究1編が見られた。

ターミナルケアに関して宮崎(2011)は、「在宅での看取りのケア『ケアの基本的な流れ』」の中で「死の予測(数日以内に死が予測される場合)のプロセスを「process1『主治医に連絡する』」→「process2『主治医が家族に説明する』」→「Process3『看護師が家族と話し合う』」→「Process4『本人・家族の意思を確認する』」→「Process5『在宅での看取りの心得を説明する』」→「Process6『会いたい人、会わせたい人に会うように話す』」→「Process7『最期の看取りの準備事項を説明する』」→「Process8『起こりえる臨終を説明する』」→「Process9『自然衰弱期に予測される身体の生理的变化を説明する』」と段階別に表にし

ている。同様に「24時間以内の死(危篤状態)が予測される場合」を「Process10」～「Process15」、「死亡後に行うこと」を「Process16」～「Process24」(グリーフケア)⁸⁸⁾として表にあらわしている。それぞれの段階で在宅看護(主として訪問看護師の役割が明記されている)。

原著では、1996年に看護教育のカリキュラムに在宅看護論が組み入れられてから20年間に訪問看護師の看護実践蓄積と共に、在宅看護計画立案修得の困難性について田口(2015)は、「在宅看護における計画立案が医療機関のそれとは大きく異なることが一因とされている。すなわち、在宅看護の目的は疾患を治すことではなく、対象の生活の質を向上させることにあり、それゆえその看護計画は、医療機関でのものと比べて個別性が高く、また正解というものがなく、訪問の都度に点検して進化されるということが必要とされるという特徴を有し、その質は看護師の力量によって大きく左右されるものである」と述べている⁸⁹⁾。

在宅看護計画立案について、科学根拠を持ったアセスメント法や自己評価尺度(訪問看護は基本的に単独で行動する)の確立を模索している苦悩が汲み取れた。

VI. 結論

在宅看護の対象は幅広く、小児、障害者、高齢者と

その家族であり、在宅看護活動は介護予防からグリーフケアまで人生の多様なライフステージに対応するように求められている。

今回、「在宅看護」と「家族」を標本単語とした検索の結果と分析により、在宅療養者の状態と家族支援について以下の課題が浮きぼりになった。

- 1)在宅看護を担う看護職の資質の向上と看護実践能力を持った訪問看護職を確保することを目的にした看護教育と継続教育の内容の整備
- 2)多死時代におけるターミナルケアを担う看護職の養成
- 3)病気であっても障害があっても生活の質を高く維持することが生きがいや満足感に繋がる。
- 4)介護家族に対する相談機能の充実
- 5)在宅ケアチームとの連携

2025年問題も深刻さを増し、2030年には47万人の「死に場所難民」が懸念されている。在宅看護では、障害があっても、病気であっても住み慣れた地域で生活し、家族や支援者とコミュニケーション力を高め、満足し看取られる環境を作り出していくことが今後の課題であると考えられる。

要旨

この研究は、1990年から2016年までの26年間に国立情報学研究所のデータベースCINIIで、「在宅看護」と「家族」を標本単語として検索し、研究、調査、資料、原著を基礎に実施した。得られた知見について、今後の在宅看護と家族支援の方向性を明らかにするため、文献検討を実施した。得られた文献から、介護保険制度実施前と事後の文献の推移を分類し、在宅看護研究の動向を分析した。その結果、在宅看護活動と家族支援について① 看護実践能力を持った訪問看護職の確保のための看護教育の充実、② 多死時代における終末看護専門職の必要性、③ 在宅における生活の質の向上、④ 介護家族の支援強化、⑤ 在宅ケアチームの連携の強化の5つの課題が示唆された。

文献

- 1)内閣府：第1章高齢化の状況 第1節高齢化の状況
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/sl_1.hym1\(2016.12.29\)](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/sl_1.hym1(2016.12.29))
- 2)炭谷靖子：「在宅看護論『在宅看護のあゆみ』」
2015, 東京, 日本看護協会出版会, 43-47.
- 3)内閣府ホームページ：高齢者の健康・福祉/平成27年度版高齢社会白書(概要版)[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/sl_2_3.html\(2017.01.05\)](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/html/gaiyou/sl_2_3.html(2017.01.05))
- 4)上野まり：「在宅看護論『療養者を介護する家族の理解と在宅における家族支援のポイント』」2015
日本看護協会出版会, 158-160.
- 5)野崎衣枝：明治文学に現れた死をみとる家族, 順天堂医療大学紀要, 64-73, 1990-03-25.
- 6)平良雅人：患者の問題行動の寛解予測方法に関する研究, 昭和大学公衆衛生学, 1993, 53(3)264-272.
- 7)川村佐和子：訪問看護における医師とのチームプレー, 順天堂医学, 1993, 39(9)321-328.
- 8)中西代志子, 高田節子, 近藤益子他：高齢者の自宅退院時における健康及び日常生活上の問題, 岡山大

- 学医療技術短期大学部紀要, 1995, 5 17-21.
- 9) 河口てる子: 在宅看護における患者・家族主体化の可能性, 保健医療社会学論集, 1997, (8)9-14.
 - 10) 上原ます子: 現場から支える在宅看護論, 家族への支援, 看護教育増刊, 1997, 37(12), 972-975.
 - 11) 佐藤美恵, 高橋香代, 池田敏子他: 在宅看護における訪問看護内容の検討, 岡山大学医療技術短期大学部紀要, 1998, 9(1) 23-31.
 - 12) 吉村信義: ドイツ・オランダ近年の福祉事情をみる: 介護保険導入と地域福祉, 北方圏生活福祉研究所年報, 1998.
 - 13) 谷本千亜紀: 在宅介護を引き受けた主介護者の役割と家族員の関係—3世代同居家族の娘および嫁介護者に焦点をあてて, 看護教育研究集録, 1999, (25), 520-529, 看護教育学科.
 - 14) 相川宏江, 足立久美子, 森村真弓他: 18トリソミー患児の在宅看護への取り組み, 日本新生児看護学会誌, 1999-03, 6(1) 56-61.
 - 15) 矢野いずみ, 堀内淳子, 沼田裕子他: 末期癌患者の在宅酸素療法移行への関わり—IVHを挿入したまま退院した1症例, 信州大学医学部附属病院看護研究集録, 1999.
 - 16) 小林奈美: 要介護高齢者を看取り終えた介護者の感想とその満足に関連する要因の検討, 日本地域看護学会誌, 1999, 1(1), 30-35.
 - 17) 樋口キエ子: 在宅介護における家族介護者としての女性, 足利日赤訪問看護ステーションの家族介護者を通して, 足利短期大学研究紀要, 2000, 20(1) 80-86.
 - 18) 高波澄子: 訪問(在宅)看護をめぐる看護職の法的責任 日本地域看護学会誌, 2000, 2(1)80-86.
 - 19) 斎藤ひとみ: 在宅看護と介護保険: 福祉制度の活用法「福祉制度の活用法の仕方」と「からだの動かし方」, 東北大学医療技術短期大学紀要, 2000, 9(1) 115.
 - 20) 篠田耕三, 櫻井美奈子, 縄田さかゑ: 病院看護から在宅看護へのケアコーディネーター, 日本看護学会論文集, 老人看護, 2000, 31, 29-31.
 - 21) 松村ちづか: 熟練訪問看護者の判断内容から導かれる終末期療養者の自己決定を実現するためのケア機能: 終末期在宅療養者の自己決定と家族の意向が不一致な状況から, 順天堂医療短期大学紀要, 2001, 12, 66-76.
 - 22) 中西陽子, 廣瀬規代美, 奥村亮子他: 終末期がん患者を介護する家族の心理過程を支える看護, 日本看護学会論文集2 成人看護, 2001, 32, 300-302.
 - 23) 小倉佳子, 稲葉考子, 五十嵐トヨ子: 在宅人工呼吸器使用患者の介護力低下時のマネージメント—療養継続の要件, 日本看護学会論文集, 老人看護, 2001, 32, 193-195.
 - 24) 橋本節美, 益子紀子, 市川文子: 在宅介護に至るまでの病棟看護婦の関わり内容の検討, 日本看護学会論文集, 老人看護, 2001, 32, 116-118.
 - 25) 松村ちづか: ある在宅痴呆老人家族介護者の自己強化のプロセスと他者との関わりの意味: Hさんの介護体験の半ライフヒストリー的分析, 順天堂医療短期大学紀要, 2002, 13, 31-40.
 - 26) 石橋文枝: 在宅看護における家族介護者の対人認知に関する研究: 男性介護者の実態, 藍野学院紀要, 2002, 16, 73-78.
 - 27) 神山千恵子, 村松林子, 平野美鈴他: プリオン遺伝子コドン232変異を持つ痴呆患者の看護と在宅指導についての経験, 医療, 国立医療学会誌, 2002, 56(11), 664-667.
 - 28) 後藤百万, 吉川羊子, 服部良平他: 被在宅看護高齢者における排尿管理の実態調査 泌尿器科紀要, 2002, 48(11), 653-658.
 - 29) 早坂信哉, 中村好一, 梶井英治: 高齢者入浴サービスに関する事故の発生頻度, 日本公衆衛生雑誌, 2002, 49(10), 1070-1075.
 - 30) 鈴木恵子, 亀岡智美, 定宏和香子他: 在宅看護場面における看護職の行動に関する研究: 保健婦とクライアントの相互行為に焦点を当てて, 看護教育学研究, 2002, 11(1), 12-25.
 - 31) 熊川ケイ, 大野かおり, 西浦郁絵他: 在宅ターミナルケアに関する研究(その1)事例にみられる「在宅ターミナルケアの諸相」の分析, 神戸市立看護短期大学紀要, 2002, 21, 81-90.
 - 32) 橋本直美, 高井奈美, 植原節子他: 介護力評価を取り入れた退院に向けての家族援助4項目追加の妥当性の検討, 日本看護学会論文集2 成人看護, 2002, 33, 231-233.
 - 33) 東恩納貴子, 狩俣京子, 田場リエ子他: 末期がん患者の在宅看護への支援—終末期における患者の意思決定と家族への関わりを通しての一考察, 日本看護学会論文集2 成人看護, 2002, 33, 189-191.
 - 34) 田川紀美子, 種吉啓子, 鈴木真知子: 医療的ケアを必要とする子どもの在宅支援に関する文献検討 日本赤十字広島看護大学紀要, 2003, 3, 61-68.
 - 35) 藤原智恵子, 松浦由紀子, 森田愛子他: 生活の場所

- に関する高齢者の意思決定(第2報):生活場所を決定するまでのプロセス,神戸市立看護短期大学紀要,2003,22,63-76.
- 36)堀良子,水口陽子,松下由美子他:安全性・適切性の観点からの訪問看護における看護技術の現状と課題,看護研究交流センター事業報告・研究報告書,2004,15,81-87.
- 37)藤原智恵子,森田愛子,松浦由紀子他:生活の場所に関する高齢者の意思決定(第3報):介護老人保健施設入所者の自宅への退所経緯,神戸市立看護短期大学紀要,2004,23,71-79.
- 38)西浦郁絵,熊川ケイ,服部素子他:在宅ターミナルを支える訪問看護実践の一考察:事例に見られる在宅ターミナルケアの諸相と看護,神戸市立看護短期大学紀要,2004,23,23-32.
- 39)三浦弘恵,舟島なをみ,鈴木恵子:在宅における看護実践自己評価尺度の開発,千葉看護学会誌,2005,11(1),31-37.
- 40)川井八重,豊田澄子,高橋美美他:体験記に見る介護予防の課題,高知大学学術研究報告,医学・看護学編,2005,54,7-17.
- 41)法橋尚宏,大脇万紀子:在宅の知的障害をもつ子どもとその家族へのweb版看護介入プログラムの開発,コンピューターサイエンス,2005,10(1),5-11.
- 42)鈴木恵子:看護実践に根ざした研究成果の産出と活用,看護研究学術研究,2005,14(1),1-7.
- 43)西浦郁絵,熊川ケイ,服部素子他:在宅ターミナルケアに関する研究(その3):神戸市立看護短期大学紀要,2005,24,17-25.
- 44)都丸直美:在宅での看取りを選択した家族の心の揺らぎに対応した看護支援のあり方—ターミナル期にある患児の訪問看護の振り返りを通して,日本看護学会論文集,地域看護,2005,36,58-60.
- 45)長瀬唱子,山尾沙織,中村之彦他:家族が在宅介護に前向きになった要因を分析して—人工呼吸器を装着したALS患者への関わり,日本看護学会論文集,地域看護,2006,37,65-67.
- 46)澤田剛,林雄二郎,田村哲嗣他:デジタルペン文字認識システムを用いた在宅看護支援における誤認識自動訂正機能(一般,テキスト情報の要約と掲示に関わる自然言語処理シンポジウム及び一般)電子情報通信学会技術研究報告.NIC.言語理解とコミュニケーション,2006,105(594)43-48.
- 47)赤羽成子,数藤綾子:家族での在宅看護を支えてくれた人々(第2特集 看護師が行う遺族ケア(3))臨床看護,2006,32(10)1486-1489.
- 48)斎藤広美,川添恵理子,松山美佳:病院訪問看護による重症心身障害児の生活の質の向上 北海道社会保険病院紀要,2007,7,36-41.
- 49)小路マスミ,鮎川春美,中園明美他:人工呼吸器を装着したALS(筋委縮側策硬化症)患者の在宅療養を支える地域支援施策,福岡県立大学看護学部紀要,2007,4(1),19(19)-27(27).
- 50)岡野初枝:ガンを患う大学院生のスピリチュアリティ,岡山大学医学部保健学科紀要,2007,17(1),33-37.
- 51)橋あかね,笹井浩介,東ますみ他:最適化した知識を提供する在宅看護/介護支援システムの構築,医療情報学,2007,27(3),329-336.
- 52)田嶋ひろみ:長期気管カニューラ挿入在宅療養者の呼吸器感染症を予防できた要因—家族介護者の介護行動とそれに影響を及ぼした因子,日本看護学会論文集地域看護,2008,39,43-59.
- 53)中野康子:訪問看護師の勤務継続と職務満足との関係,兵庫県立大学看護学部地域ケア開発研究所紀要,2008,15,43-59.
- 54)坂下玲子,大塚久美子,新井香奈子他:高齢者にとっての望ましい口腔保健行動の検討:第一次調査結果,兵庫県立大学看護学部・地域ケア研究所紀要,2008,15,83-92.
- 55)王麗華,木内妙子,小林亜由美他:在宅看護現場において求められる訪問看護師の能力,群馬パース大学紀要,2008,6,91-99.
- 56)小路ますみ,小森直美,藤岡あゆみ他:看護職・他部門間のコミュニケーション・リスクの構造,福岡県立大学看護学部紀要,2008,5(2),61(19)-65(23).
- 57)渡邊八重子:松山赤十字病院における病院と在宅看護・介護の連携 - 患者・家族の療養生活の支援と看護の専門性の地域への貢献,看護管理,2008,18(9)790-795.
- 58)川口淳美,松下祥子,伊藤恵理子:在宅療養開始後における退院支援の評価と退院支援内容に関する研究(地域・在宅看護コミュニティケア～生・老・病・死をささえるネットワーク～,第19回日本保健科学学会学術集会)日本保健科学学会誌,2009,12(Suppl)16.
- 59)角田直枝:看護学の観点からみた家庭の概念(特集「家庭らしさ」とはなにか)老年社会科学,2009,30

- (4). 528-523.
- 60) 藤田尚子, 安田智美, 吉井忍他: 家族介護における褥創予防行動と介護負担感・肯定感との関連 日本看護研究学会雑誌, 2010, 33(2), 113-124.
- 61) 永石喜代子, 福田博美, 石井美紀代他: 地域における看護技術(清潔簡潔導尿)の講習会の検討, 2010, Iris health9. 31-36, 2010
- 62) 岡豊子, 高橋永子: 透析療法指導看護師が行う在宅における透析継続のための援助インターナショナル nursing care research, 2010, 9(3), 33-41.
- 63) 長谷川美津子, 鈴木加乃, 菊地京子: 特定機能病院看護職の退院支援活動に事例検討会が及ぼした効果, 日本看護研究学会雑誌, 2011, 34(4), 95-101.
- 64) 西山緑, 古市照人, 上川雄一郎他: 地域包括医療実習の受講生の特性とその教育効果に関する研究 Dokkyo Journal of medical sciences, 2012, 39(3), 181-191.
- 65) 牛久保美津子, 横山詞果: 病院から在宅ホスピスへの移行期における患者・家族の状況 日本プライマリ・ケア連合学会誌, 2012, 35(4), 371-372.
- 66) 鷲尾昌一: 家族介護者の介護負担: 介護負担を減らすために看護職に求められるもの, 聖マリア学院大学紀要, 2012, 3. 9-12.
- 67) 西江利子: 13トリソミー・全前脳胞症をともなった児のケア 小児看護, 2012, 35(1)24-32.
- 68) 岩出るり子: 小児訪問看護の現状と在宅退院に向けた支援, 小児看護, 2012, 35(7), 871-875.
- 69) 佐藤明美, 加東晴子, 片倉直子: 終末期在宅看護における家族支援: 高齢者世帯の在宅療養継続に関する一考察, 日本看護学会論文集, 地域看護, 2013, 43. 23-26.
- 70) 片山敏子, 荒井陽子, 木坂恭子他: 在宅で終末期を迎える高齢者を介護する高齢者家族の満足感に関連した要因, キャリアと看護研究, 2013, 3(1). 33-40.
- 71) 皿海麻衣子, 香田由紀, 井出麻利子: 終末期の子ども在宅看護, 第51回福岡赤十字看護研究会収録, 2013, 51(27), 59-61.
- 72) 中本さおり: 経管栄養を必要とする子どもと家族へのかかわりや課題, 観察のケアのポイント 小児看護, 2013, 36(7). 852-858.
- 73) 遠藤幸子, 添田啓子: 特別支援学校における経管栄養を必要とする子どもと家族への支援: 自立活動(教育活動)を支援する立場から, 小児看護, 2013, (7). 859-867.
- 74) 大園康文, 福井小紀子, 川野英子: 終末期がん患者の在宅療養継続を促進・阻害する出来事が死亡場所に与えた影響—継時的なパターンの分類化 Palliative Care Research, 2014, 121-128.
- 75) 谷田恵美子, 大元雅代: 在宅看護における家族への看護: 家族看護の視点, インターナショナル nursing care research1, 2014, 3(4). 65-75.
- 76) 塚田桂子: 利用者さんとご家族に教えてもらった訪問看護 訪問看護と介護, 2014, 37(8). 860-862.
- 77) 奈良間美保, 松岡真理, 花井文他: 小児の在宅看護: 子どもと家族を主体にした支援, 小児看護, 2014, 37(8). 909-1096.
- 78) 安井かおり, 高橋歩, 後藤真美子他: 訪問看護師のとらえた排液ドレナージを留置したまま在宅療養をすることでの困難さに対する支援の構造, 人間看護学研究, 2014, 12. 15-23.
- 79) 古川秀敏, 魚里明子, 森田智子他: 認知症高齢者と生活する家族の認知症に対する認識—1事例の面接調査結果をとおして, 関西看護医療大学紀要, 2014, 6(1), 46-54.
- 80) 田口理恵, 河原智江, 西留美子他: 在宅看護過程における看護計画立案の基盤となる能力: 熟練の訪問看護ステーション管理者のインタビューから, 共立女子大学看護学雑誌, 2015, 2. 1-9.
- 81) 下舞紀美代, 古川秀敏, 黒田裕子: 日本における NANDA-1看護診断“死の不安”の適用の実際 関西看護医療大学紀要, 2015, 7(1). 12-20.
- 82) 栗田麻美, 奥田真紀子: 奈良県における在宅看護の変遷と現状, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 2016, 12. 4-13.
- 83) 魚里明子, 伊木智子, 古川秀敏: 健康生成に向かう「健康に生き抜く力」の構成要素に関する一考察: 外来通院中の2型糖尿病患者の事例から, 関西看護医療大学紀要, 2016, 8(1). 51-61.
- 84) 近藤浩子, 牛久保美津子, 吉田享他: 群馬県内病院看護職の在宅を見据えた看護活動に関する実態調査, 北関東医学, 2016, 66(1). 31-35.
- 85) 厚生労働省: 「認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)」 <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000064084.html> (2016.7.13)
- 86) 鈴木和子: 「家族看護学 理論と実践」第1章第1節『家族看護学の発展過程』2014, 東京, 日本看護協会出版会, 7-8.
- 87) 公益社団法人 認知症の人と家族の会: 平成23年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増

進等事業 認知症の介護家族が求める家族支援
のあり方研究事業報告書 [http://alzheimer.or.jp/
largefile_for_wp/2011kazokushien_houkoku.pdf](http://alzheimer.or.jp/largefile_for_wp/2011kazokushien_houkoku.pdf)
10-18(2016. 12.26)

- 88)宮崎和加子監修, 池田洋子, 隅倉芳子, 田尻友子他
著:「在宅での看取りのケア家族支援を中心に『ケ
アの基本的な流れ』」2011, 東京, 日本看護協会出
版会, 10-11.
- 89)田口理恵, 河原智江, 西留美子他:「在宅看護過程
における看護計画立案の基盤となる能力:熟練の
訪問看護ステーション管理者のインタビューか
ら」, 共立女子大学看護学雑誌(2015)